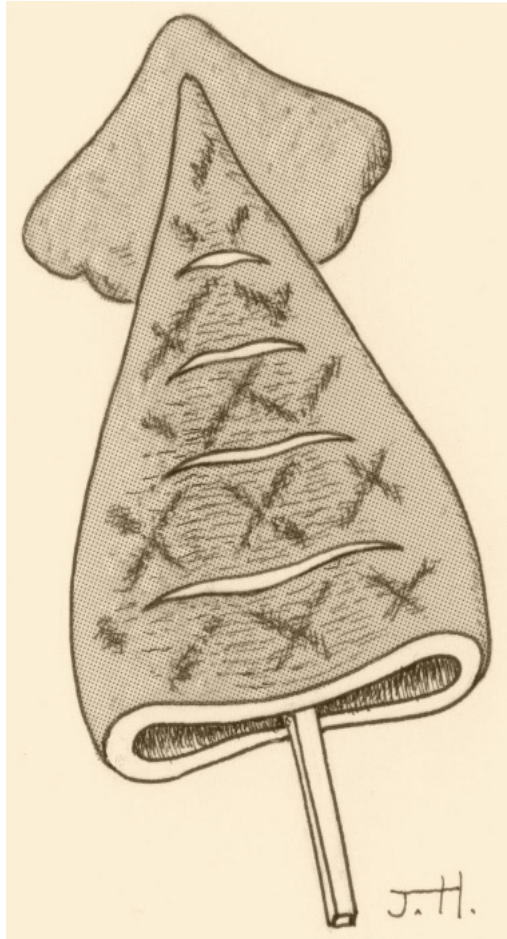


味の記憶

イカ焼きデンドンデーン

—文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、
わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の
数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！



●縁日の王様はイカ焼き

子どもはいかがわしいものが大好きだ。縁日の怪しげな商品を扱う露店、地方巡業サーカスの手品ショーや下ネタ満載のドサ回り一座の芝居小屋、仕掛けが古臭くてお粗末なお化け屋敷など、そこに共通するのはいかがわしさ。それがかえって子供たちをひきつける。

かつては縁日や運動会、花火大会、花見ともなれば、数えきれないくらい露店がでていた。そこには、いかさますれすれのすぐに壊れてしまうおもちゃ、飼ってもすぐに死んでしまう金魚などの小動物、たちまち枯れてしまう植木鉢など数多く紛れていたが、その中から掘り出し物を引き当てるのが、くじ引きのようで楽しかった。

ちよいこわもての金魚すくいのおじさんに、「この金魚飼ってもすぐに死なない？」と聞けば、「ぴんぴんじゃ。金魚の年で百歳は生きるわ」と調子よい返事が返ってくる。さらに、「金魚の年で百歳つてどれぐらいや」と突っ込むと、「坊やが立派な大人になるまでは大丈夫じゃ」と太鼓判を押される。一事が万事この調子で、子どもなりに売り手の風体、仕草、表情をうかがいながら商品の品定めをする。ス力をつかませられないよう用心しいしい掘り出し物を見つけようとするのだが、大

方は売り手の術中にはまってしまふ。しかし、そうした露店の出物の中で、食べ物以外の例外である。客の予想を裏切らない。うまそうなものは期待した通りにうまいし、一見してまずそうなのは正直にまずい。子供たちにとつて人気ベスト3は、綿菓子とバクダン、イカ焼きだ。

綿菓子は溶かした砂糖を綿状にしたものだ。外側を透明のビニールで覆われたボックス台にしつらえた綿菓子機には、加熱できる回転釜と周囲を取り囲む受け皿がついている。回転釜の周囲には非常に小さな穴がいくつが開けられており、釜を加熱しながら高速で回転させ、溶かした砂糖をその穴から遠心力で吹き飛ばす。それがたちまち空气中で冷えて糸状に固まる所を、すかさず割り箸で回し掬い取るのだ。その形状がまるで綿のようなので、この名がついたのだろう。

綿菓子は白の他、着色されたピンクや水色などカラフルだ。目の前でみるみる雲のようにふんわりした形状になる様子は夢をかきたて、そのフワフワとした甘さとあいまって、子どもを虜にする。

ちなみに、綿菓子は西日本の呼び方だそう、東日本では綿飴と呼ばれることが多いとか。私は宮崎出身なのでもちろん前者の呼び名で通っていた。バクダンは地域によって、ポン菓子、

ポンポン菓子、ドン菓子、バクダンあられともいわれるが、米菓子の一種だ。

作り方は、回転式筒状の圧力釜に生米を入れ、蓋をして、釜ごと回転させながら加熱する。十分加圧したら、圧力釜のバルブをハンマーで叩いて蓋を解放して一気に減圧。この時、米の水分が急激に膨張し、爆裂音を伴い、釜から米がはじけ出て、取り付けてある網籠に入るといふ寸法だ。この爆裂音から、いろいろな呼び名が付いたらしい。当時は、縁日でなくても、おじさんが圧力釜とガスバーナーを積んだリヤカーをバイクでひき、家々を回っていた。ラッパを吹き、「ばくだーん、ばくだん」と呼び声をあげながら、バクダン売りのおじさんが近所にやって来ると、皆遊びを中断。各自家に勇んで駆けかえり、生米を持参して集合した。今かいまかと爆裂音なるのを、耳をふさぎ、ドキドキして待つ。これがまた楽しいのだ。

ドキドキした後は、サクサクと軽い食感と砂糖をまぶした甘味を存分に楽しんだ。値段は分量によって、10〜30円くらいだと思う。

しかし、何といつても、縁日の食べ物

の王様はイカ焼きだろう。炭火をおこした網台の上に、竹串にさした生スルメイカをのせ、最初に軽く焼いた後、甘醤油ダレの壺にイカをくぐらせる。それを再び網台にのせて

焼く。そして、タレの少し焦げた香ばしい匂いが出てきたところで出来上がり。あまり焼き過ぎると身が固くなって台無しである。

縁日の露店群の中で、この甘醤油だれの少し焦げた匂いは、ひととき食欲をそそり、客を引き寄せた。他に比べると、子どものおやつ代としては割高で、当時で50円から100円はしたと思う。お年玉や祭り用の特別なお小遣いをもらった時とか、親が同伴しているときでないとなかなかありつけない代物であった。

ところが、ウチでは父親が縁日の露店での買い食いを禁止していたのだ。なかでも、イカ焼きは厳禁。そんな殺生な。

理由は、「露店ではろくに材料を水洗いしていない。仕込みの際に材料を平気で土間や畳の上に置いてあったりする。だから不衛生極まりない」ということだった。

したがって、親同伴でイカ焼きを食べることは望むべくもない。だが、禁止されればされるほど、余計食べたくなるのが、子どもの性。親の目を盗んでは、自分のお小遣いをはたき、獲物にありつくしかない。そのスリルがますますイカ焼きに私を駆り立てた。というわけで、私は縁日が近づくと、日々のお小遣いを節約し、貯め込んだお金をイカ焼きに注ぎ込む。それが常

になった。

ただし、五、六歳では、スルメイカ一匹を食べるのは少々荷が重い。畢竟、うちの抜け目ない六歳上の兄や三歳上の姉の助けを借りることとなる。両親の目から屋台での買い食いを隠すためにも二人の協力がぜひ必要なのだ。

そんなわけで、いつのまにか、自身は兄と姉、私は足つまりゲソの部分、という役割分担ができていた。それでいて、お金を払うのは私。かなり分は悪いのだが、大好きなスルメイカにありつくには、少々のは目をつむるしかない。

二人は残ったお小遣いで、好きなものを物色する。だがけっして、私に分け与えようとはしない。高度成長期の冷徹な資本主義の論理は、子どもの世界にも、容赦なく押し寄せていた。

●アコーデオン弾きの傷痍軍人さん

「もはや戦後ではない」といわれた昭和三十年代半ば。ありふれた祭りの光景の中でぼつねんと取り残されたような一団がいた。それは、第二次大戦の戦禍で身体に障害をもった傷痍軍人さんたちだ。

彼らは仕事に就くこともできず、その生涯を国立療養所や国立病院機構の元で過ごすこととなった。そして、彼

らの多くが、そこから通いで都会の人通りが多い駅前や地元の祭りや縁日の露天商が並ぶ通りにやって来ては、通行人から金銭を貰い小遣いとしていた。

その中には、二七傷痍軍人なる輩もかなり紛れていた。もともと、大方は元軍人で、復員しても職にありつけなかった人たちである。

ある意味で、この人たちも戦争の重度の被害者なのだが、このせちがらい世相では、彼らに目をくれる人も、だんだんと少なくなっていた。

「二七傷痍軍人じゃなかと？ 怠けているだけじゃ」などと、白眼視する人さへ増えていた。

その日もそうだった。姉の小学校の運動会で、片足で松葉杖の傷痍軍人さんが、アコーデオンで軍歌を弾いていた。とても悲しい調べであった。

私は知らぬふりをして通り過ぎることが、どうしてもできなかった。傷痍軍人さんが立っているすぐ先には、目当てのイカ焼きがある。ここですごいジレンマが起こる。

手に握りしめたお金は、イカ焼きにつきこむべきか、それとも、かわいそうな傷痍軍人さんのお布施箱に入れるべきか、ずいぶん悩むわけである。その私に、傷痍軍人さんの視線とアコーデオンの調べが、ひしひしと訴えかけてくる。

そして、悩みに悩んだ挙句、私は清水の舞台から飛び降りた気持ちで、せっかくこの日のために貯めたお金を、お布施箱に全部入れたのだ。

するとまもなく、兄と姉が私に追いつき、「何しとつと？ 早くイカ焼き行こう」と声をかけてきた。

「今日はいらんが」と答える私。

「なしてや、いつも楽しみにしとんのに」といぶかしむ兄。

「もう小遣い使ってしまったもん」と私。

「なんに使ったとや」とつっこむ兄。「傷痍軍人さんに……」さらに答える私。

「お布施したんか、バカたれが。ありや偽もんじゃ」と兄があきれたように言う。そして、「あんた、だまされたん」と姉が追い打ちをかける。

そうこうしていると、母親がやってきた。

「何、もめとんの」

まさか、イカ焼きを買いに来たとは、言い出すわけにもいかない二人が答えた。

「こいつが傷痍軍人にお布施したというから、そりゃだまされたんやと言つとつたと」

すると、母親は、「まあいいやないの、その人に同情してやったことなんやから。それより早く運動場に行かんと間に合わんよ」と、一切とりあわなかつた。

た。

はたして、兄や姉が言うようにだまされたのか。その時、私はどちらかというど、善行をした、という自己満足感の方が強かった。

その出来事から二日ほど経ち、通いの駄菓子屋『べんきよう堂』で、傷痍軍人さんを見かけたのだ。

向こうは覚えていないわけもないが、こちらは忘れるはずがない。その時に目にした傷痍軍人さんは、すつくと両足で立っていた。やはり、兄や姉が言ったようにだまされたのだ。

彼は、駄菓子屋の看板娘と何やら親しそうに話していた。彼女はレイコという名で、私より一歳上で、近所でも評判の器量よしだ。

私がわざわざその駄菓子屋にやって来るのも、半分はその娘が目当てであった。そういうわけだから、二人の関係が大いに気になるところ。

翌日も店に行き、ちょうど店番していたレイコに、思い切って、その軍人さんの事を聞いてみた。

「ああ、あの人？ 私の親戚や」

その答えにひとまずは安心で、私が過日の顛末をレイコに告げると、

「ああ、祭りの日なんかにお布施をもらったりしているみたいね。そんなことしちゃだめと周りに注意されとらんやけどね。そう、あんたお布施したん、いいところあるやない。でも、あの

おじちゃんもかわいそうな人なんよ」

レイコが語るところによれば、その人は、仲間が南方でほとんど死んで自分だけが生き残ったことが、原罪になっていた。今もその時のショツクが尾を引き、一時的に精神を病んだそうなの。そのため、復員してからは仕事についてない。縁日などに出て軍歌を唄うのは、戦死者への追悼ということらしい。しかしなぜ、片足を失くした傷痍軍人になりすますのか。レイコの説明ではもう一つ判然としない。やはり、そこは小遣い稼ぎということなのだろう。

ともかく、その人が戦争で心を病んだのは、確かである。その意味では、れつきとした傷痍軍人だ。となれば、私の目に狂いはなかったことになる。一片の真実があつたのだ。兄姉よ、ざまを見せらせ。

●ひょうきん者のヤスさん

それを契機に、それまでほろくに口をきいたこともなかったレイコとは、かなり急速に仲がよくなった。これも善行のご利益だ。

私が店に行くど、「あんた、ゲソ焼きが好きなんよね。安くしとくから」と、店番のレイコがおまけしてくれる。レイコは商売の売り込みもうまいのだ。すらつとした長身で気が強くおしゃまの二つ年上の美少女。私にとつ

てはまぶしい存在であった。つい散財させられたが、それ以上の発展は望むべくもなかった。

ところが、好機は思わぬところからやってきた。

六歳くらいになると、好敵手のマサアキは小学校に入学していたので、午後すぎにならないと、近所に遊び相手がなくなつた。ヒトミやマユミが相手では思うにまかせない。

そんなわけで、家から少し離れた距離まで遠征し、遊び相手を新たに開拓した。その一人がヤスさんというひょうきん者だ。

ヤスさんの家は町の中心部近くであり、二歳上の兄がいて、町中にはちょっと不良っぽい年上のイッチちゃんという仲間がいた。ヤスさんと仲良くなることで、自分を取り巻く世界が一挙に広がつたのだ。

ヤスさんと友達になり、遊びのスタイルも随分と変わった。

それまでは、パッチンやメンコにビーム玉（注）、缶蹴りや鬼ごっこ、相撲やチャンバラといった、アウトドアの遊びが主だったが、ヤスさんはそういう遊びは苦手なようだった。とりわけパッチンやメンコ、ビーム玉は、年長のマサアキや兄シゲキ、水っ洩のヒロシなどを相手に腕を磨いている私に、ヤスさんは歯が立たない。

ただし、新案特許の遊びを作り出す

ことにかけては、大いに才能を發揮した。どちらかというと、インドアなものが得意で、有名な漫才コンビやコメディアンに扮した物まね遊びは、お気に入りの一つだ。

中でも、漫才師のアチャコ物まねやコメディアンのトニー谷、時代劇のアラカンなどの物まねは絶品。アチャコの独特の言い回しをまねるのだが、ヤスさんのちよつとふつくらした風貌と相まって、観客は腹を抱えて笑う。トニー谷に扮する際は、母親のレディーズ眼鏡にスカーフを蝶結びにして、算盤をもつて歌いだす。変装までやってのけるのだ。

それらは一種、彼の芸風になり、そのひょうきんぶりで、誰とでもすぐに仲良くなるから、町の人気者であった。いつものように二人で遊んだ後、駄菓子を買いに、『べんきょう堂』に寄つた。そこにはあのレイコがいた。

「あれっ？ 二人は友達なん」とレイコが聞くと、「うん、最近仲良くなつた」とヤスさんが親しげに答える。レイコとは私より付き合いが長いようである。

「今度三人で遊ぼう」とレイコが言う。

その言葉を待つてました！ と心ひそかに思う私。それなのに、「そうやねえ」とあまり気乗りしないヤスさんの返事。実に残念。

「じゃあ、今度イッチちゃんここに、この子も一緒に連れて行こうよ」

「あそこはちよつと……あつ、これ買うから、ほな、行こう」と、ヤスさんは急に慌てて私の手を引っ張り、店を出た。

「イッチちゃんが『最近ヤスを見ないけど、たまには家に遊びに来い』といつとつたよ」とレイコの声が、二人の背中越しに聞こえた。

ヤスさんはそくさと店を出ると、怪訝な顔をしている私に、珍しくマジな顔で声をひそめて言った。

「イッチちゃんはちよつとアブねえ奴だから、近づかんほうがいい」

小学五年生のイッチちゃんは、この町ではちよつと名の知れた悪童だ。腕力が強くて、上級生の六年生も一目置く存在。いつも周りに子分を従え、弱い者いじめは朝飯前。相手が年少者でも、容赦なくいたぶる残忍なところがあつた。そんな奴だから、虎の威を借る親衛隊は別にして、取り巻きの多くは、本音では好いてない。乱暴で怖いからしづしづ隷属するという具合だった。しかし、そういう奴ほどさびしがり屋。イッチちゃんは当時でいう鍵っ子で一人っ子。なので、取り巻き連を家に集めては悪企みを考えて遊んでいた。実は、このイッチちゃんと私の兄は反目しあう仲。片やガキ大将で片や不良悪童という構図だ。ただし、兄は市内

の小学校にバス通学していて、イッチ

さんは地元の小学校、相對することはなく、兄の方が一歳年上のこともあり、直接ぶつかることはなかった。互いにその評判を聞くだけである。

それはともかく、私はレイコとヤスさんがかなり親しく話していたことがひどく気になった。ついでに言えば、レイコとイッチさんはどういう仲なのか、ヤスさんはイッチちゃんの子分だったのか、その事が妙に頭にひっかかる。と、その時、10mほど先に大柄な小学生が立ち、こちらに向かって「おいヤス、何しとんや」と叫んでいる。いま話題に上ったばかりのイッチちゃんである。

「やべえ」と顔をしかめるヤスさん。だが、イッチちゃんがみるみる近づいてくると、素早く態勢を立て直し、愛想よく笑顔で、「あつ、イッチちゃん、こっちはセツちゃんという友達」と私を紹介した。

「ちょうどいい。今からみんなで俺ン家で遊ぶことになったから、お前たちも来い」と有無を言わさぬ命令口調。

私たちはただつき従うしかない。イッチちゃんの取り巻きの中でヤスさんは最年少だが、彼の物まね芸は、皆が集まる座興にはもってこいで、それでヤスさんに呼び出しがかかるといっわけだ。

●イケナイ遊び

「そっちの部屋で待つとれ。好きなおもちゃで遊んでいいから。腹が減つとったら、向こうの部屋の菓子を食べとれ。もう少し経てばみんな集まってくるから」

そういうと、イッチちゃんは、通りを隔てた祖母の家に行く、と言って家を出た。

イッチちゃんの家は『べんきょう堂』から100mも離れていない、町中心部にあった。高い塀に囲まれた大きな家にはいくつも部屋があり、家じゅうおもちゃだらけだった。

見たこともないような巨大なレーシンググサーキットが真ん中にどかんとしつらえてある部屋もあれば、使わなくなつたおもちゃのガラクタで埋まる部屋もある。縁側や芝生が伸び放題の中庭には、ラジコン式のレース・カーのおもちゃが幾台も無造作に放置され、噴水のある池には、大きなラジコン式モーターボートが浮かんでいた。いずれも壊れているわけではなく、遊ぶのに飽きて打ち捨てられているだけだ。

おもちゃなんかめつたに買ってもらえない当時の男の子にとっては、それは垂涎的。それが目的で集まって来る子も多いのだ。

おまけに、この家には当時珍しいリビング兼用のダイニング部屋があり、

大きなテーブルのクリスタル鉢にはバナナやメロン、オレンジ、パイナップルなど高級果物が盛られ、別の銅製の深鉢皿にはクッキーやチョココレット、キャラメル類がてんこ盛り。食い意地のはった悪ガキ連にはこれまた、たまらない。

それから、イッチちゃんの家にはなぜかおしゃれな子供服の在庫品がいっぱい置いてあり、とてつもなく大きな三面鏡と香水や化粧品、アクセサリーの類もふんだんに揃っていた。試着自由で、女の子にはそれが魅力であった。しかし、こんな大きな家にどうして子ども一人でほったらかしにされているのか。

ずっと後で大人から聞いた話では、大きな会社を経営している父親は外に愛人を囲い、家を留守にしがちで、それが面白くないから、母親は母親で市内にブティックを開業して商売に打ち込んでいた。そんなわけで、昼間の子ども世話はもっぱら、通りを隔てた離れ屋に住む一人暮らしの祖母が。ただ、祖母は足が不自由なため、別宅と本宅とを頻りに往復できない。そこでイッチちゃんに家の合鍵を持たせて、昼食や夕食は別宅で用意することにしたのだ。

イッチちゃんがグレたのもひと倍さびしがり屋なのも、こうした家庭環境が災いしていたに違いない。いずれに

せよ、これらのものをエサに、イッチャンは子分のようにつき従う取り巻き連をつくっていった。

二人でラジコンやサーキットで遊んでいると、取り巻き連の年長の男女が三々五々集まってきた。そして、イッチャンも祖母宅から戻ってきた。

「よし、みんな集まったな。今日はヤスが新入りを連れて来た。何かやってもらおう。そうや、二人で何かやれ」十人ばかり集まった一同の前に、いきなり、私らへのご指名。皆を面白がらせることをやらなくてはいけない羽目になった。

「どうしよう」とすっかり困惑する私に、ヤスさんはしばらく思索して、「大丈夫じゃ、俺がアチャコやるから、そうや、セツちゃんはいつもの三平やれ」と機転を聞かして囁いた。

すなわち、ヤスさんがアチャコの十八番「そりゃ滅茶苦茶でござりまするがな」で、私にはエンタツは荷が重いので、林三平の決め台詞「ども、すいません」で掛け合いにするというのだ。とりあえず打ち合わせは終り、ひとえにヤスさんの芸風が頼りだ。

すると、イッチャンがイライラして「早くやれ」と催促を入れてきた。

ヤスさんが間髪入れずに、「はいはいはい、いきなり？ そりゃ滅茶苦茶でござりまするがな」と始める。

すかさず私が「ども、すいません」と返す。以下、この繰り返し。

「そりゃ滅茶苦茶でござりまするがな」

「ども、すいません」

「そりゃ滅茶苦茶でござりまするがな」

「ども、すいません」……

ヤスさんがいつものアチャコ似の表情で演じれば、私は左手でグーの握りをつくり前頭部にあてた三平のポーズで返す。これを延々と続けた。

掛け合いというより単なる決まりギヤグの繰り返しだが、さすがヤスさん、一同からヤンヤの喝采。大いに受けたのである。

「すげえ面白かった。じゃあ、お前たちはあつちの部屋で遊んで行くか、それとも帰りたいか？ どっちでもいいぞ。レイコは今日は店番で来ないぞうだから」

おもわず二人とも「帰る！」と即答していた。

「そうか、また遊びに来いよ」と名残惜しそうなイッチャン。振り向くと、大きな声で「年長者組は集まれ！ あつちの部屋に行くぞ！」他の連中に声をかけていた。

すると、女子からは「イヤーン」と桃色の嬌声があがり、男子は顔がやに下がって「えへへ」と下卑た笑いをしている。

なんだなんだ？ いったい何をするとこのだろうか。

「皆でイヤラシイことすつとよ」

怪訝な顔をしている私に、ニヤニヤしながらヤスさんが小声で言う。

「イヤラシイことすつとよ？」

「お医者さんごっこしたい」

「みんなでか」

「そうよ」

六歳でも、そうした色気づいた情報の意味することが何であるかは、すでに知っている。ふーむ、不良とは聞いていたが、やるのがえげつない。ともかくも、二人はそそくさとイッチャンの家を出た。

しかし、一つ大きな疑問が湧く。

「レイコは何でイッチャンの家に行くの？」

「イッチャンが妹のようにかわいがつとるわ。レイコはおしゃれ好きやし、モデルになりたいと言つとるくらいやから、目当ては洋服の着せ替えよ」

ヤスさんはこともなげにいうが、私の頭には「もしかしてお医者さんごっこも……」と不吉な想像が働いていた。

●お医者さんごっこ

この日のことは家族にはもちろん黙っていた。ヤスさんと私だけの秘密であった。イッチャンの家での出来事

この日のことは家族にはもちろん黙っていた。ヤスさんと私だけの秘密であった。イツちゃんの家での出来事があまりに強烈だったため、があまりに強烈だったため、しばらくはヤスさんの家に遊びに行くのを控えていたが、いかがわしいワル遊びの誘惑には抗いようもなく、まもなくヤスさんの家通いを再開した。

母親には「最近、マユミちゃんたちが『セツちゃんが遊んでくれん』といつとつたよ。たまには遊んでやりー」と言われたが、「ふーん」と気のない返事をして家を出た。

途中、ヒトミとマユミにあった。「また町へ行くん？ 兄ちゃんたちが蓮池にスッポンとりにいこうといつとつたよ」

マユミがいう蓮池とは、田畑への灌漑用水用の大きな貯水池だが、そこにはスッポンが棲息していて、大きなナマズも棲んでいた。夜には河童が出ると、子どもらの間ではまことしやかに噂されていた。探検ごっこにはもつてこいの場所である。

そういえば、久しくマサアキラと探検ごっこをしてない、と振り返る私。「そうかあ、いつ行くか兄ちゃんに聞いてとつて」と返事をした。

でも、町中の悪仲間との遊びも刺激が強くてやめられない。今はどちらかというと、ヤスさんらとの遊びに比

重がかかっていた。家から小道伝いに林を抜けて、町役場近くまで来ると、ヤスさんの家はすぐそこだ。

すると、役場と通りを挟んだ向かいの小屋の窓から顔をのぞかせたヤスさんが「セツちゃん、こつち、こつち」と手招きして呼ぶではないか。

この小屋は役場の体育施設用の用具を保管している物置き小屋だが、どういうわけか窓に鍵がかかっていた。窓が小さくて大人では入れないため、つい油断して閉め忘れるのだ。しかし、小さな子どもならやすやす入る。

小屋内には跳び箱が積み上げられ、床にはマットレスが敷き詰められ、昼寝するにはもつてこい。ヤスさんと私の秘密基地として使っていたのだ。

「どうしたん？ そんなところに一人で隠れて」

「一人やないと、レイコも一緒やが」すると、レイコが窓から顔を出した。

レイコも一緒に秘密基地にいるとはどういうわけ？ まさかお医者さんごっこ……？

そんなこちらの邪推などつゆ知らずヤスさんとレイコが誘う。

「セツちゃんも入れや」

「あなたの好きなゲソ焼きもおやつ用に持って来とるから」

家から小道伝いに林を抜けて、町役場近くまで来ると、ヤスさんの家はすぐそこだ。

すると、役場と通りを挟んだ向かいの小屋の窓から顔をのぞかせたヤスさんが「セツちゃん、こつち、こつち」と手招きして呼ぶではないか。

この小屋は役場の体育施設用の用具を保管している物置き小屋だが、どういうわけか窓に鍵がかかっていた。窓が小さくて大人では入れないため、つい油断して閉め忘れるのだ。しかし、小さな子どもならやすやす入る。

小屋内には跳び箱が積み上げられ、床にはマットレスが敷き詰められ、昼寝するにはもつてこい。ヤスさんと私の秘密基地として使っていたのだ。

「どうしたん？ そんなところに一人で隠れて」

「一人やないと、レイコも一緒やが」すると、レイコが窓から顔を出した。

レイコも一緒に秘密基地にいるとはどういうわけ？ まさかお医者さんごっこ……？

そんなこちらの邪推などつゆ知らずヤスさんとレイコが誘う。

「セツちゃんも入れや」

「あなたの好きなゲソ焼きもおやつ用に持って来とるから」ゲソ焼きと聞き、とにかくエサに

は弱い私である。まして、憧れのレイコにそう言われたら断われない。しかし、何だかやばい雲行きになりそうな予感がする。ともかく、私は目につかないように裏手に回り、その窓からすばやく小屋内に入った。

「この間はすまんじゃったねえ、イッちゃんの家につき合せて」とヤスさんが謝る。

「二人の漫才が大うけたったんやて？ もっといればよかったのに」とレイコがかぶせる。

「そうはいかん、あとはみんなでイヤラシイことするっちゃから」

「それじゃおられんねえ」とレイコが私の顔見て意味ありげに言う。

「でも、今日は大丈夫よ、うちらだけやから」と、レイコの目がきらりと光った。

やはり、私の予感は当たっていたのだ。かなりのおませとは思っていたが、これは想像以上のようだ。「ズベコウ」という言葉が浮かんだが、憧れていただけに認めたくはなかった。

「レイコも浮気もんやなあ。セツちゃんが入ったんやて」

ヤスさんも芝居がかって、私の反応を見る。さらに、からかうように問いかけてくる。

「どうや、やるか？」

「もちろんするよねえ、あんたもとレイコが畳みかけてくる。」

ここまで来たら逃げられない。好奇心と助平心も手伝って、ウンウンとうなずく私。

「じゃあみんなで脱ぎ脱ぎや！」とヤスさんの一声が合図、お医者さんごっこの始まりである。……この後の展開は、何せ秘め事ですから、ご想像にお任せするでしょう。

しかし、みんなで遊んだあとに並んで食べたゲソ焼きは実にうまかった。懐かしくも、その味と匂いがリアルに蘇ってくる。それは、特別な体験記憶に結びつくからなのだろう。

ただし、子供のやることだから、今思えば幼稚で他愛ないということだけは、名誉(?)のため、自己弁護しておきます。

●秘め事はどこかで漏れるものあり

家に帰っても昼間の事を思い出すと、なかなか興奮さめやらずの私。就寝時間になってもなかなか寝つかれない。気が付けば、隣に寝ている姉の方にすり寄っている。

「何、くっつくつくと、気持ち悪い子やねえ、離れんね」と姉の厳しい声。

それを何度かしつこく繰り返していると、姉が寝返りを打ってこちらを向き、

「何かあったと？ 今日のアんたはなんかイヤラシカ」と尋問してきた。

「何もありません」とへどもどする私。

「嘘つきなや、正直に言ってみい。あんた最近ヤスさんと遊んどるみたいやけど、あの子はイッちゃんという不良の家に時々出入りしているそうや。ひよつとして、あんたも行ったんやないの？」

さすが、情報通で勘の鋭い姉。いきなり核心を付いてきた。

「一度だけで、すぐに帰ったもん」

凶星を差され動揺した私は、つい本当のことを言う。すると、

「それだけか？ 秘密にしておくから正直に言ってみない」と、さらに追及の手が。

「なんもないとよ」と、むきになる私の態度に、姉の疑いはますます核心に迫る。

「ヤスさんにはレイコというガールフレンドがいるそうやけど、あん子もイッちゃんの家に入っているそうや。イッちゃんは女子を集めてイヤラシカ遊びしとるといって噂やけど、あんなたちもやつとるとちやうかか？」

姉はずばずば痛いところをついてくる。ますます動揺する私。

「三人で遊んだのは今日がはじめてやが。姉ちゃんが言うようなこととはないと」

とつさに否定するが、姉の誘導尋問はうまい。今度は猫撫で攻めてくる。

「はーん、今日初めて、どうりで。今日はあんた、なんかイヤラシイと思

ったけど、三人で悪ざしてたんやる。正直に言ってみい、みんなには内緒にとくから」

外堀も内堀も埋められた私はついにギブアップ。今日の顛末を姉にすっかり打ち明けた。

すると、姉はいま交わしたばかりの約束を反故にして、布団からすつくと起き上がり、居間の方にいる母親の所に向かった。

「お母さ〜ん、あん子はイヤラシイことしとるよ〜」とご注進したのである。

姉から仔細を聞いた母親は、父の夜食の用意をしていたらしく、包丁を片手に寝室に飛び込んできた。そして私の布団をはぐと、

「あんた、なんばしよつとね」「お医者さんごつこつて、三人でか?」「ヤスさんと二人でレイコちゃんをキズモノにしたんか」と次々とまくしたてるように責め言い立てた。

片手に包丁を握り、もう一つの手で私の肩を掴み揺すり回す母。その形相は真つ青だ。こちらとしては生きた心地がない。

それから小一時間みっちり、母と姉が取調官となつて、三人でしたことを微に入り細に入り自白させられた。

幸いこの日は、兄は市内の叔母の家に外泊し、父親はあいかわらず午前様帰り。もし、兄と父がこの場にいたら、どんな修羅場になつたであろうか、そう思

うと身震いした。すつかり、先ほどまでの興奮は消し飛んだのだ。

私から仔細を聞き取った母は、最後に、「あした『ペンきよう堂』に謝りに行くから」と宣告した。

三人の秘密を母親に知られるなど、絶対に起こつてはならない事態である。しかも、レイコの親に謝りに行くと言う。それを思うと、後悔ばかりが先に立つ。頬がげっそりやせ細るようなひどく落ち込んだ気分のまま、いつのまにか寝についていた。

●穴があつたら入りたい

翌朝、私は母にたたき起こされ、耳を引つ張られながら『ペンきよう堂』へと向かった。

事の良し悪しより三人の誓いを破つたことが何より面目ない、二人に合わせる顔がない。道すがら、この最悪の事態を免れるよい方法はないものかと必死に思案するが、無情にも『ペンきよう堂』が目前に迫つた。万事休すである。

「さあ、入るよ」ちよつと興奮気味に母親は、前にもまして強く耳を引つ張りながら、意を決して店の中へとずんずん入つていった。

「あら、こんにちは。どうしたの、セツちゃんは何?」

『ペンきよう堂』のおばあさんが、母親に耳を引つ張られながら入ってくる、

その尋常ならざる様子に目を白黒させて言う。レイコの祖母である。

「今日はこの子がレイコちゃんにとんでもないことをしでかしたことを、とるものもとらず、まずはお詫びにと伺つたしだいだ」「ほら、あんたも謝らんね」

母の一気に畳みかける口上。そして、深々と腰を折り、私にも無理やり同じ姿勢をとらせた。

その様をおばあさんはボカーンと口をあけて見入るばかり。

「いったいどうしたと?」

「いえ、この子がレイコちゃんに、……オ、オ、オ、イシャ……その、お医者さんごつこつこというですね、とんでもないことをしたというものですから。まずは、お詫びにと……」

母親はその言葉を口にするのさえ憚られるみたいで、どもりながら赤面し謝つた。

「はあーん、そげんことやつたとねー」
ようやく、おばあさんはこの尋常ならぬ親子の態度が、何に由来しているのか合点した。

「そりゃあ、大変やつたね」とおばあさんが私の顔をまじまじと見て言う。

私は穴があつたら入りたい心境である。そして、だめ押し之母の一声。

「レイコちゃんいますか、直接この子に謝らせたいと思つて」

「レイコ、降りておいで」と、おばあさんが店から自宅に続く勝手口の土間

に顔を入れて呼ぶ。私にとつては、それは死刑宣告のように聞こえた。

「何んねえ、おばあちゃん」とキャンデーをくわえながら降りてきたレイコ。

「セツちゃんとお母さんがあなたに謝りたいんやと」とおばあさんが言う。

「何を？」レイコはこちらをちらつと見ながら不審そうに聞く。

「あなた、セツちゃんとお医者さんごっこしたつちやろ、しょうもなか、本当にマセちよるばい」とおばあさんが返す。

「そんな、何も悪いことしちよらんが！」と口答えするレイコ。レイコは私の方をどんくさい奴と蔑むような目で一瞥した。本当に穴があつたら入りたい！

「いえ、悪いのはこの子ですから、レイコちゃんごめんね。もしキズモノにでもさせていたらと思うと気が気じゃなく……。」と二人の会話に割って入る母。

「ほら、あなたも謝らんね」と、私の頭を無理やり押さえる。

キズモノとはあまりにも大仰な。その事態進行の理不尽さに、私は絶望的に開き直った。母親の押さえつける手を払い、あの得意の林家三平のポーズで、

「どーも、すいません」と、やけくそ気味に言っただけなのだ。

一瞬、何が起ったのかとたじろぐ母。

「なんね、その態度は。まじめに反省せんね」と、さらに怒りの火に油を注ぐ

ような結果となった。

そこをおばあさんが苦笑交じりにとりなす。

「いいがいいが。元はと言えばレイコの方が年長やから、こん子もマセとるかいらん知恵をセツちゃんに授けたとばい。お母さんもそんな大げさにせんでよか。子どものやることやからたいしたことなか。かわいいもんたい」そして、「なあ、レイコ！」と孫に視線を投じる。

「うちはなんも悪いことはしちよらんが」

レイコはあくまでシラを切り通す。あつぱれ！

「よかよか。もうなかつたことにしまつしよ、なあ、お母さん」

そう、おばあさんに論された母は、ひたすら恐縮の態で、私の耳を引っ張りながら店を出た。

そして、ふうと一息入れたあと、母は私に向かって言った。

「もうわかつたやろ、自分がしでかしたことが。先に帰つとりい。私はいちおうヤスさんのお母さんの所に報告だけはおしておくから」

それだけ言うと、母はすたすたとヤスさんの家に向かって歩き出した。私は一人しよんぼりとぼとぼ家路についた。

いまごろ、母はヤスさんにも会っているのだろうか、三人の秘密が私から暴露され、自分の母親にも知られたことを、ヤスさんはどう思うだろう。きっと、私

を「裏切り者」と思うだろう。

先ほどレイコは、「どんくさいヤツ」と蔑むような目で私を見ていた。最後までシラを切り通していたレイコはあつぱれである。まるで、「問い詰められたときはこうするのよ」と私に言ってるようだった。

子どもの世界では、事の良し悪し、理由はどうあれ、まず仲間との秘密、約束は守るのが一番の掟。それを破った自分は何んな罰を受けても仕方ない。

もう、大好きなゲソ焼きを『ペンキよう堂』で買って食べることもあるまい。いや、レイコが売ってくれるわけがない。

もう彼女と親しく話をするかもしれないだろう。淡い初恋は終わったのだ。うっかり、姉に気を許したばかりに……。

秘め事は最後まで隠し通さなければならぬのだ。

がらんとした家の中で、あれこれと後悔の念に苛まれるが、覆水盆に帰らず。

すっかりしよげこんだ私は、知らず知らずのうちに

♪イカ焼きゲソゲソ ♪ゲソ焼きゲソゲソ ♪ゲソ、ゲソ ♪どーも、すいません

と口ずさんでいた。(了)